

Title	サマリア発掘調査史考(一)
Sub Title	A historical survey of the excavations st Samaria (I)
Author	小川, 英雄(Ogawa, Hideo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1968
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.41, No.3 (1968. 12) ,p.123(461)- 135(473)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19681200-0123

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

サマリア発掘調査史考 (一)

小川 英雄

一、サマリアの歴史

サマリア (Samaria) は一九六七年六月にイスラエル軍によって占領されたヨルダン川の西側の旧ヨルダン王国領内にあり、現在は遺跡東部に小村落があるにすぎない。

古代のサマリア市は西紀前九世紀に、イスラエル王国 (北王国) の王オムリ (Omri) が、テルザ (Tirzah) からここに遷都した時にはじまる。旧約聖書 (列王紀上 16: 23f.) はその時の事情や名前の由来について、次のように記している。「彼 (オムリ) はテルザで六年王であつた。彼は銀二タラントでセメルからサマリヤの山を買い、その上に町を建て、……その山の持ち主であつたセメルの名に従つてサマリヤと呼んだ。」

サマリアは海拔約四〇〇メートルの丘で四方を谷にかこまれている。従つて、守るのに好都合の地形であつたが、頂上の広さは大都市として不適當で、ローマ帝政期につくられた最も外側の城壁をみても、最大のさしわたしは約一キロである。

オムリ王朝はここにソロモン時代のイエルサレムと同じよう

な、カナン・フェニキア的の文化を採用した宮廷生活を営んだ。旧約聖書は当時の宗教的墮落を非難している。⁽²⁾ 前八五〇年にはエフ (Jehu) が王位につき、一種の宗教改革を行つたが、それ以後、アシリア帝国の臣従国になつた。そして、前七二二年にはアシリアの王シャルマナセル五世 (727~722 B. C.) と次の王サルゴンのために町が包囲・占領され、北王国の歴史が終つた (列王紀下 17: 34f.)。二七、二九〇人がメソポタミアへ移住させられ、サマリア地方へは後にサマリタンと呼ばれる人々が入植した。

前三三一年にはアレクサンダー大王が来てサマリアを破壊したが、セレウコス王朝時代には要塞となつた。前一〇七年にはマツカベイ王朝のヒルカヌス (J. Hyrcanus) が破壊したが、前五八年にはローマの將軍ポンペイウスの部下ガビニウス (Gabinus) が再建した。ヘロデ王朝時代には、ヘロデ大王の大建築活動のおかげで、サマリアの歴史上最も壯観を呈するに至つた。彼はローマの初代皇帝アウグストゥスから受けた恩恵に感謝するために、盛土工事によつて広い敷地をつくり、そこにアウグストゥス神殿 (Augusteum) を築いた。⁽³⁾ 又、古名サマリアをアウグストゥス

(ギリシア語名セバストス)にちなんで、セバステ (Sebaste) と改めた。現在の地名 Sebastieh もこれに由来する。その後、魔法使いのシモンの活動が盛んであったが、ピリポ、ヨハネ、ペテロ等キリストの弟子たちの布教があり(使徒行伝 8: 5~15)、第四世紀までにキリスト教化された。⁽⁴⁾

以上のようなサマリアの歴史は旧約聖書、アシリアの粘土板文書、ヨセフス等からも十分に伺えるのであるが、過去二回の発掘調査によつて更に多くの知識が得られたばかりでなく、パレスティナ考古学の方法論が確立されるに至つたのである。

1. Reissner-Fisher のサマリア発掘

サマリアの最初の発掘は一九〇八年から一九一〇年にかけてハーヴァード大学の手によつて行われた。G. Reissner が中心となり、C. Fisher が建築家として補佐した。結果に対する評価は別として、これはパレスティナにおける最初の組織的・方法的な発掘であつたと云える。

報告書は一九二四年に出版されたが、⁽⁵⁾ Reissner 等がこの研究をまとめるに當つて参照し得た発掘報告書は、現在の水準から見ると極めて不完全なもの数冊にすぎなかつた。即ち、G. Schumacher のメギッド (Megiddo) ⁽⁶⁾ (1903-5) や R. A. S. Macalister のゲゼル (Gezer) ⁽⁷⁾ (1902-9) の発掘は、これ等の遺跡の重要性のために、今日でもなお参照されるものであるが、発掘の組織上の欠陥から層位学的考察がほとんどなく、全く誤つた編年を提供し

た。又、E. Sellin のターナク (Taanach) ⁽⁸⁾ (1901-4) も層位を無視した。但し、Macalister と F. J. Bliss のシェフヘラ (Shephelah) の四遺跡の調査は最もすぐれていたが、Reissner がサマリア調査に當つて考へた密度からすれば、かなり荒つぱいものであつたようである。即ち、ここでは F. Petrie の方法が忠実に行われており、土器の編年が重視され、大まかな時代区分 (Early Pre-Israelite, Late Pre-Israelite, Jewish, Seleucidan) にほゞ正確な年代が与えられた。しかしながら、出土物の組織的な記録はこのように行われたにもかかわらず、出土地点のそれがな

いたために、遺跡全体の層位学的認識からはほど遠い状態にあつた。サマリアの発掘着手以前のパレスティナ考古学のこの段階の水準は、主として F. Petrie によつて到達されたものである。彼は W. F. Albright が指摘するように、⁽¹⁰⁾ 出土物の組織的な記録や土器の特色による年代決定と云うような重要な方法論上の発見をなしとげたが、他方では M. Wheeler ⁽¹¹⁾ が批判するように、きわめてルースな現地の発掘管理からくる複雑な層位認識、発掘事例が乏しかつたことからくる土器の編年、特に絶対年代の不安定さと云うような重大な欠陥が克服されないまま、放置されていた。

このようにみると、Reissner はほとんど手本なしに仕事をはじめたものと考えてよい。彼はエジプトの発掘調査については深い経験を持っていたが、パレスティナでは初めての仕事であつた。又、発掘開始の前数年間は、トルコ当局との折衝、他の任務との重複、資金調達の不確かさなどのため、必らずしも恵まれた発掘

をしたとは考えられない。それにもかかわらず、彼は事前に測量、建築、記録などについてかなり入念な構想をたてていたにちがいない。Albrightによると、⁽¹²⁾彼は Petrie の土器と層位についての新しい見方と、Koldewey & Dörpfeld の遺構の取り扱いは方と、中西部アメリカ人特有の上手な大組織運営術とを結びつけることによつて、一九〇八年をパレスティナ考古学の技法上決定的な進歩を施した年にしたのである。

Reisner-Fisher の報告書の詳しい分析は後に記すとして、彼がはじめて遺構と出土物（とりわけ土器）の対応関係を現場で正確に記録し、両者についてそれぞれ絶対年代をとまう編年を提示し、遺跡の正しい歴史像を描くことに、当時としては極めて著しい程度にまで成功したことは事実である。勿論、考古学以外の史料から知られるサムリア史や碑文が、彼のサムリア史像の骨格をなしていたことも事実であるし、報告書の記述が余りに複雑で一見無秩序とみえるような欠点を持っていた。⁽¹³⁾

報告書中に示された時代区分、年代は次のようになっていた。まず、建築物の年代として、Israelite, 889-721 B. C.; Early Post-Israelite; Pre-Herodian, 300-60 B. C.; Roman, 40 B. C.-A. D. 400 があげられ、更に文献史料の援用により確認された個々の遺構により狭い範囲の年代を与える。土器の年代としては、Israelite, 900-700 B. C.; Babylonian-Grecian, 700-300; Hellenistic, 300-50 B. C.; Roman 50 B. C.-A. D. 400 と分類される。これ等の年代は土器の層位学的観察と比較の結果と云う

よりも、文献史料によつて与えられた遺構の年代にもとづくものであることは確かである。しかし、そのようにして信頼しうる年代決定の基点を出し、とりわけ土器について、各時代の土器グループの特色を固定することが出来たのは、当時の水準としては大きな業績であつた。とりわけ、サムリアの遺跡の歴史的性格から得られた比較的後期（殊に、鉄器時代末期からローマ帝政期）の考古学上の年代は、Kenyon の研究（一九五七）⁽¹⁴⁾があらわれるまで、パレスティナにおいては大した変更も加えられなかつた。

サムリアのように、その起源、町の拡張、破壊、再建などが、それぞれについて年代ばかりでなく、その事情まで文献によつて分つているところは、考古学の調査にとつて甚だ有利である。そのような与件なしには一つの地帯又は文化圏の出土物の絶対年代は大ていは定め得ないであろう。しかし、出土した遺構と既知の史実の一致に依存する発掘は、結局層位学的なものとは云えない。Reisner のサムリア研究は遺構の層位を正しく見抜いて、文献史料と正しく照応させた場合が多いが、そのために遺構についても、そこからの出土品についても、文献史料以上の詳しい編年を打出すことは最初から不可能であつた。このような遺構を基準とする発掘を止め、層位を基準とする発掘にして、全遺構と全出土品の層位を確立し、そのあとで、文献史料その他（古泉や碑文）で絶対年代を定めうる層をさがすことにしなくては、考古学が歴史研究に寄与することは出来ない。そのようにした場合、遺構（建造物）と出土品（土器等）の関係は必ずしも機械的に一致しな

い。後者は埋められている位置によつて、その附近の遺構とは異つた年代的意味を持つことがあり、層位上均一な土器のグループをとり出すことと、遺構の建築物としての解明とは一応独立した問題である。この意味で、Reisner 等が建造物と土器とに異なる年代を与えたことは正しく、Crowfoot-Kenyon の報告書においてもそれは踏襲されている。

Fisher はサマリアの発掘から得られたこのような教訓をメギッド (Megiddo) の発掘で活用した。上述のように、メギッドは Schumacher によつて手をつけられたことがあつたが、彼の発掘は、明らかにサマリアよりも歴史が長く、しかも文献史料の豊富なこの遺跡から大した成果もあげずに終つた。一九二五年から一九三九年まで行われたシカゴ大学のオリエント研究所による発掘は、Fisher の指揮の下に、層位学的方法によつて行われた。しかし、Fisher が重病にかかつた上、後継者たちが初代の隊長ほど有能でなかつたために、重要な点で現在に至るまでしばしば論争の種を提供することになつた。報告書は層位を基準として記述され、形式上はそれ以後の発掘報告の範となりうるものを示したが、層位の年代そのものや土器の鑑定において極めて不安定である。いずれにせよ、サマリアと同時代の諸層は四つ (IV-1) あり、そのうち鉄器時代は三つ (IV-II) を占める。E. Wright によつて与えられたそれ等の年代は IV, 900-810 B. C.; III, 810-733/2 B. C.; II, 733/2-609 B. C. である。しかし、このような修正された年代は後のものであつて、メギッドの報告書の中に与

えられたものは極めて粗雑であつた⁽¹⁸⁾。

他方、Reisner-Fisher の方法を正しく受け継いだ W. F. Albright は南パレスティナのテル・ベイト・ミルシム (Tell Beit Misim)⁽¹⁹⁾ においてそれを実際に用い、パレスティナ考古学の層位学的発掘の標準的作品を提出した。しかし、サマリアと同時代の部分については A₁, A₂ の二層しか見出されなかつた。

なお、上述のように Reisner のサマリア発掘は文献史料と遺構を正しく結びつけたが、それをもとにして、サマリア史が書かれた。小著であるが、このようなものが現われたことは、サマリア発掘の史料的価値を裏付けるものである。

三、Crowfoot-Kenyon のサマリア発掘

K. M. Kenyon がイギリスのパレスティナ考古学の最大の実力者であることは疑いない。彼女は Wheeler の弟子として出発した。イギリス国内のローマ時代遺跡 (St. Albans-Verulamium, 1930-35; Leicester, 1936-39; Wroxeter-Viriconium, 1936-37; Southwark, 1945-48; Sutton Walls, 1948-51) を助手或は隊長として発掘するかたわら⁽²¹⁾、一九三二—三四年の J. W. Crowfoot 指揮のサマリア発掘にも従事し、遺跡の主要な部分を助手として調査した。この成果は戦後上出のような三巻の報告書となつたが、その中の彼女の報告書の高い学問的価値によつて、以後 Wheeler の方法を西アジア考古学の主流たらしめたのである。

Kenyon 自身、サマリア以後イギリスが送つた大きな発掘

(Jericho, 1952-58; Jerusalem, 1961-66)⁽²²⁾では隊長をつとめ、
イエルサレムの英国考古学院長(一九五二—一九六六)でもあった。
一九六六年までは主としてヨルダン領パレスティナで活動してい
たイギリスの若手の発掘家たちも彼女の弟子である。

Kenyonの影響力はまた彼女が長い間勤務していたロンドン大
学の考古学研究所(Institute of Archaeology)の西アジア科
でも明らかである。私が在学した当時(一九六六—七)は、メソポ
タミア考古学の講師は建築の専門家 Seton Lloyd 教授で、西ア
ジア科の主任を兼ね、大家の風格をそなえた授業ぶりであった。
一方、アナトリア考古学は J. Mellart 氏が担当し、土器の編
年と層位学によるアナトリア青銅器時代のくわしい講義をしてい
た。彼は Kenyon のジェリコ発掘にも助手として参加しており、
Wheeler-Kenyon の方法を小アジアの先史時代にあてはめて大
きな成果をあげつゝある。又、シリア・パレスティナ考古学は P.
J. Parr 氏の担当で、彼はイエルサレムの英国考古学院の書記を
兼ね、前者同様、Kenyon の方法によつてシリア・パレスティナ
のヘレニスティック時代と青銅器時代とを研究している。Kenyon
自身が転出した後、この二人が考古学研究所における彼女の後継
者であると云えよう。

又、Kenyon の方法は英国々内ばかりでなく、フランス、アメ
リカ、イスラエル等のパレスティナ研究の長い伝統をもつ国々の
考古学者たちにも影響を与えつゝある。

ついで、Crowfoot-Kenyon のサムリア報告書の第三卷(出土物

サムリア発掘調査史考 (一)

篇)が出たのは一九五七年であり、著者等が参照し得た他の遺跡
に関する報告書はその当時既に十指に余るものがあつた。それ故
Albright が云うように⁽²³⁾、この報告書をすぐれたものにさせたの
は、このように多くの事例が集められ、その際に土器の編年につ
いての知識が進歩していたからである、とも云えよう。しかし、
サムリアの報告書、とりわけその中の Kenyon の研究報告がそ
のような有利な条件に頼ることだけで書かれたものでないことは
明らかで、とりわけ実際に発掘が行われていた一九三〇年代に
は、前記(一二四頁)の他に二、三の報告書が知られていたにす
ぎない。又、発掘の過程がうまく管理されていなくては、他にいか
に多くの比較資料があつても優秀な報告書を書くことは不可能で
あろう。そう考えると、Kenyon のサムリア発掘は、最初からそ
れまでのものとは異なるものを持つていたとしないでならない。

Kenyon の観察がいかに厳密であつたかは、Reisner の発掘⁽²⁴⁾
が Israelite とよんだ一つの時期の間に、六つの時期(Periods)
を層位として確認し、そのそれぞれについて層位のはつきりした
土器グループを取り出し得た、と云うことから分る。Kenyon
は更に、723/2 B.C. のアッシリア軍によるサムリア攻略後、前
三世紀初頭までに三つの時期をとり出し、その後にも以下に記す
ようにくわしい時代分けをすることが出来た。

- 第一・二期 前八七〇—八六〇 B.C オムリ・アハブ時代
- 第三期 前八四〇年頃 エフ時代
- 第四期 前七九八年頃又は七八一年頃

(四六五) 一二七

第五〜六期 前七五〇年頃以前

第七期 前七二二〜七〇〇年頃

第八期 a 前七世紀初頭

” b 前六〜五世紀

第九期 前三世紀初頭以前

Early Hellenistic 前二世紀初頭前後

Hellenistic 前一五〇年以前

Late Hellenistic 前一〇七年前

Pre-Herodian 前六四〜六三〜三〇年

Herodian (=Roman 1) 前三〇〜一〇B・C

Roman 2 後一世紀初頭

” 3 (セヴェルス朝時代?)

” 4 後四世紀

Kenyon のサムリアの遺構に対する観察はきわめて的確で、その議論は説得力がある。この層位の区分については以後の研究においても大筋はくつがえつていない。いずれにせよ、鉄器時代からローマ時代までの時代区分について、これほどの細分が、層位学的根拠にもとずいてなされ、かつ、それに対応する土器の編年が提出されたのは、それまでのパレスティナ考古学の進歩からみて驚異的なことであつた。このようにして Reissner-Fisher の発掘結果を全く一新することが出来たのは、遺構と文献史料の照合を中心にした層位や時代区分の決定を廃止し、床面とその下の土層からの出土物とを層位決定の基準とする、より純粋な考古学的

方法を採用したからであつたと思われる。即ち、床面はそれがつくられた時に、それと同時代の遺物を含む土層を封印する、と云う考えから出発して、床面のつくられた年代をもとにする建築年代 (Building Period) とそれによつて封印された土層の出土品をもとにする土器年代 (Pottery Period) とを定め、その後で文献史料にあらわれる絶対年代を参照しつゝ上記のような編年が完成されたのである。

Kenyon はこのような理由によつて、自分が決定した建築年代と土器年代とは全く照応すると信じたが、G. E. Wright は二年後に、これが修正されるべきことを主張した⁽²⁵⁾。即ち、Kenyon の考えた如く、建築年代をそのすぐ下の土層の土器年代と結びつけるよりも、後者を前者より一つの前の生活層と結びつけるのがよい、と云うのである。こうしてみると、Kenyon が提出した建築・土器両年代のうち、後者は一つづつ前の年代にずらすべきであると云う結論が導びかれる。

かくて、Wright が提出した鉄器時代サムリアの新しい時代区分は次のようになる。

建築年代	土器年代	絶対年代
	I—II	前一〇世紀—九世紀初頭
	I	ca. 八七五—八四二 B・C
	II (?)	八四二—八一〇
III	III	八一〇—七六〇
IV	IV	七六〇—七三五
V	V	

この問題は遺構と附屬の出土物についての非常に複雑な關係を含んでいるので、一般的な原則が導出出来るかどうか疑問があるが、サマリアと相似した構成をもつ遺構を掘ることによつて実験的に判定する以外にないと思われる。いづれにしても、このような論点も Wheeler 流の入念な層位の觀察と解釈、層位的に均一な出土物の摘出、こうした目的のための厳密な現場管理から出て来たものであり、これ以後の主要な発掘はすべてこのようなより高いレベルで行われるようになった。そして、その結果、イギリスのパレスティナ考古学は文献史学とは独立した歴史科学としての性格をつよめた。⁽²⁶⁾

なお、Crowfoot-Kenyon 以後、サマリアの発掘調査は行われていない。現在はローマ時代の列柱など大きな遺構が形骸をとどめるだけで、保存状態はあまりよくない。案内書としては、Hamilton と Jahshan のものがある。⁽²⁷⁾ 又、出土物としてはロンドン大学考古学研究所に整理された土器標本があるし、立像、碑文、裝飾等の重要な遺物はイェルサレムのパレスティナ考古学博物館（ロックフェラー博物館）に陳列されている。⁽²⁸⁾

ついで、Crowfoot 隊のサマリア報告書は一九三二—一九三五年の間の全発掘の結果をまとめたもので、発掘の年次別報告ではな⁽²⁹⁾。これは作業と報告書刊行の間に長期間が経過したために、内容にもとづく総合的報告が可能になつた結果である。

しかし、この報告書の最も著しい特色は Kenyon によつて書

かれた部分⁽³⁰⁾と Crowfoot 夫妻をはじめとする他の寄稿者による部分とが、異つた原理にもとずいている、と云う点にあらう。即ち上述の如き Crowfoot 隊の成果の殆んどすべては Kenyon の研究になるものであるのに対して、Reisner-Fisher の仕事を方法的にひきつぎそれを確認し、又拡大すると云うのが他の人々の立場であつた。それをやや詳しくみると、次のようなものがある。まず第一巻の建築篇では、「頂上の建造物」(Summit building) と呼ばれるイスラエル時代の宮殿址とアウグストゥス神殿を除く諸遺構（イスラエル時代の城壁、墓、小神殿、ヘレニスティク時代の切石積円塔や砦、ローマ時代の城壁、競技場、列柱付大通り広場、劇場、コレー神殿、水道、墓等）は隊長 Crowfoot と副隊長の E. L. Sukenik とが報告者となつた。

この二人の方法論は Reisner-Fisher のものを踏襲しており、遺構の説明を中心にして記述する。又、調査の対象が直接層位の確立と關係のないものである場合が多く、コレー神殿⁽³¹⁾の場合のように、層位学的発掘を行うべきであつた場合でも、出土物の立体的記録は不十分の上、絶対年代を主として碑文や美術様式に依存し、土器の編年が重視されていない。

これに対して、Kenyon による「頂上の建造物」の取扱いは、層位の確定についての討論を中心としている。それは各建物の歴史ばかりでなく、サマリア史全体に興味をもつ読者の要求に応えるその学問的根拠を与える。これは発掘の全期間を通じて、報告書作成の段階に至るまで、一貫して層位の歴史の意味を追求するの

でなくては出来ないことである。他方、遺構の説明を中心課題とするならば、その報告書の読者はその遺構に特殊な興味をもつものに限られ、サマリア史の正確な史料を望む読者にはしばしば不十分な知識しか与えないことになる。ここに Kenyon がパレスティナ考古学にもたらした方法の意義がある。

このような Kenyon の目的にとつて、出土物は層位の明瞭な小数のもの（主として封印された土器群）のみが意味をもつてくる。とりわけ土器類の多くは層位が不明瞭な場合、史料としての価値を全く失つてしまう。それ故、彼女は小数のたしかな土器について、入念な比較研究をすることによつて、それまでの土器の編年を一新したのである。彼女のサマリア土器の研究の第一原則は型式学的配慮と多数決的・平均値的な年代決定とを拒否することであつた。

Crowfoot 隊の出土物研究は報告書の第三巻にまとめられている。そこには碑文、古泉、彫刻、土偶、印章、ガラス製品、石製品、金属製品、骨角器等についての報告の他に、Kenyon と Crowfoot 夫人による土器類についての二つの研究が並列されている。そして、両者の記事は建築篇の場合と同じように全く異つた原理によつて書かれている。博物学者であり、土器鑑定家であり、サマリア発掘に際しては記録係であつた G. M. Crowfoot は、出土物のあらゆる型式の標本をあつめ、それを型式に従つて分類し、型式に対して年代を与える方法で一貫した。従つて、彼女のリスト (“General List”) には層位の不明瞭なものも多く含まれてい

る。勿論、それにもかかわらず、それまでのパレスティナ考古学の提供した比較資料と現場での観察により、遺構とのゆるやかな関連はつけられている。例えば、ある形式の土器（或はある土器の形式）は第Ⅲ～Ⅵ期にみられる、或はそれは第七世紀後半に多い、と云うような形においてである。この方式は Crowfoot 夫人の非常にすぐれた鑑定家としての能力と努力と云うことを別にすれば、Reisner-Fisher の報告書のものと同原則上大差ないのである。

これに対して、Kenyon は出土地点の不明のものを一切捨て、まず層位に従つて分類した後に形式毎にまとめた。この最後の手続きは図版をわかりやすくするためのもので、土器研究の必要上のものではない。こうして選ばれた小数の土器が (“Stratified Groups”) その後のパレスティナ考古学の土器編年の基礎になつたのである。

Crowfoot 夫人と Kenyon の二つの土器研究の史料的价值は明らかである。Crowfoot は歴史性をもち得ないものをもつものと同じレベルで並列した上、後者の歴史的コンテクストをもばかしてしまつた。Kenyon は建築の場合と同じように分類、比較においても、歴史的意味の追求と云う点で一貫した。それは層位のはつきりした出土物のグループをとり出せるだけの十分な現場の管理をもとにしており、そこから土器の編年と遺構の年代との結合が生れたのである。

この二つの方法の差異はサマリア出土の土器と他の遺跡のそれとの比較の際にもあらわれている。Crowfoot 夫人はしばしば他

の遺跡の発掘者による根拠のはつきりしない土器編年や形式起源論を採用するが、Kenyon は報告書中に特に一章⁽³²⁾を設けて、他の報告書の結果を修正することが出来たのである。

現在、ヘレニスティック・ローマ時代の土器編年の研究で最も権威ある Lapp の集成⁽³³⁾の中では、サマリアについては専ら Kenyon の業績のみがとりあげられ、彼女の方法論が殆んどそのまま通用している。この問題について、Lapp は次のように述べている⁽³⁴⁾。

「Kenyon 女史の、資料としての価値をよく吟味した、層位の明確な証拠だけを認める方法は、同じ巻(第三巻)の中の、類似資料の相当無批判な集成にもとづく、Crowfoot 夫人の形式的記述と鋭いコントラストをなす。Kenyon 女史の編年上の諸結論は層位の明瞭な証拠が乏しいために常に問題なしとは云えないが、次のようなことを示している。即ち、或る遺跡において層位を急に観察するならば、それは由来のはつきりしない、あいまいな年代しかわからない、多数の類似した土器群よりも、はるかに大きな編年上の意味をもつのである。」この言葉は一九三〇年代に Kenyon がいかに大きな仕事をなしたかを示すものである。

後記

ここに記されたことは、サマリアの発掘調査の歴史をふりかえり、パレスティナ考古学の方法論が確立して行く過程を概観したにすぎない。内容的には、今日の日本の考古学者には珍しいことではないであろう。

Albright が云うように⁽³⁵⁾、いかなる地域の考古学的研究においても、その初期においては層位学的研究が主体となる必要があるとすれば、Kenyon のサマリアでの活動までのパレスティナ考古学はまさにその時期に当り、Kenyon はその大成者である、と云えよう。そして、Wheeler の弟子として突然にパレスティナに現われた彼女が、しばしばパレスティナ考古学の発達史のコンテクトを無視することから生ずる誤りがいろいろ指適されるにも拘わらず、現在刊行中のジェリコの報告書が次々と出され、又発掘中のイェルサレムについても研究がまとめられるならば、Kenyon のパレスティナ考古学における地位も当然ゆらがないであろうと思われる⁽³⁶⁾。

註

- (1) 即ち、サマリアの歴史は鉄器時代中期以後と云つてよいのであるが、一九三一～一九三五年の発掘によつて、初期青銅器時代の生活址(貯蔵用堅穴、排水溝)や土器片も発見された。
J. W. Crowfoot et al., *Samarra-Sebaste I*, 1942, pp. 91ff.; II, 1957, pp. 91ff.
- (2) 主として上記の発掘によつて、オムリ王朝の宮殿址が明らかにされた。それは、西アジアの他の地方の宮殿址と比較すると、甚だ貧弱な遺構であつたが、発見された多数の象牙細工断片は宮殿の裝飾であつたと考えられ、そのモチーフのフェニキ

ア風なことは、旧約聖書の記事と一致する。J. W. and G. M. Crowfoot, *Samaria-Sebaste II*, 1938. なお、ペレスティナ・シリアの象牙細工の発見例については次のような研究がある。C. Loud, *Megiddo Ivories*, 1939; R. D. Barnett, *Catalogue of the Nimrud Ivories in the British Museum*, 1957; Tel Halaf, Corsabad, Arslan Tash などからも出土している。

(3) この種の盛土による神殿土台の形成の例として、イェルサレムのヘロデ大王による大神殿、ゲラサ (Gerasa or Jerash) のアルテミス神殿、ウン・マル・アマム (Umm el-'Amed) のシルク・アシユタルト神殿と東神殿、シドン近くのホスタン・エック・シェイク (Bostan esh-Sheikh) のヒンメメン神殿などがある。Cf. M. Dunand et R. Duru, *Oumm el-'Amed, une ville de l'époque hellénistique aux échelles de Tyr*, 1962, p. 22 et p. 237; *Samaria-Sebaste I*, 1942, pp. 126f. 前者の著者たちによれば、傾斜面の盛土による水平化はペルシア帝国に由来するのであって、イラン南部のバサルガダエのキュロス王の宮殿、ペルセポリスやササに先例が見出される。更にこれ等の先駆として、マスジディ・スライマン (Masjid-i Sulaiman) とバルディ・ニンナンダ (Bard-i Nishundah) と広大な盛土工事跡が存在し、その源は北方 (カスピ海南西) のウラルトゥ (Urartu) にあると云われる。Cf. R. Ghirshman, *Iran, Pelican Book*, 1954, pp. 122f. ウン・マル・アマム

のものについては、拙稿「ウン・マル・アマム」発掘報告書の再検討」*オリエンツ* Vol. X, No. 3, 1967, pp. 83~104 参照。

(4) その後はイスラム教徒と十字軍の時代となるが、アシリア軍がサマリアを占領した後、この地方に移住させた人々が土着化し、ユダヤ教を信じるようになったのをサマリタンと呼び、現在サマリアの近くの名所ナブルスに五家族四百人が特殊な社会を保っている。Hasanein Wasef Kahen, *Samaritan History, Identity, Religion and Subdivisions, Literature and Social Status*, Jerusalem, 1966.

(5) D. G. Lyon, G. Reisner and C. Fisher, *The Harvard Excavations at Samaria, I (text), II (plates)*, Cambridge (Mass), 1924.

(6) G. Schumacher, *Tell el-Mutesellim*, 2 Bde. 1908.

(7) R. A. S. Macalister, *Gezer*, 3 vols., 1912.

(8) E. Sellin, *Tell Tannek*, 1904.

(9) R. A. S. Macalister and F. J. Bliss, *Excavations in Palestine during the Years 1898~1900*, 1902.

(10) W. F. Albright, *The Archaeology of Palestine*, Pelican Books, 1963, pp. 29f.

(11) M. Wheeler, *Archaeology from the Earth*, Pelican Books, 1966, pp. 29f. Wheeler の Petrie に対する批判は余りに厳しすぎると思われる。ペレスティナ考古学の当時の状態、とりわけ、盗掘を恐れたためとは云え、オスマン・トル

コ帝国の官僚の学問的研究に対する無理解や、土民の無知、治安の悪さなどの客観的条件が無視され、当時のイギリス国内の発達した市民社会の中での発掘とパレスティナでの発掘とが不当に対比されている。しかし、Petrieのきわめて大きな影響力がその後長い間パレスティナ考古学の方法論を粗雑なまゝにしたことは事実であろう。発掘計画の段階から、現場の管理、報告書の作成までを一貫した層位学的原理で通すことを強く要求する Wheeler 流の考え方が、今ではパレスティナ考古学の主流となつたが、第二次大戦の前後まで多くの発掘隊長がその必要に気がつかなかつた。例えば、テル・エン・ナスベ (Tell en-Nasbeh) を掘った W. F. Badé に対する Wheeler の批判 (op. cit., pp. 30f.) は、Albright による讚辞 (op. cit., pp. 42f.) より正しいと考えられる。しかし、Wheeler によるパレスティナ考古学発達のコンテクストを無視した批判では、Reisner や Albright によつて、Petrie の方法論が改善されて行く過程が理解されないのではないかと思われる。

(81) W. F. Albright op. cit., p. 34.

(82) 今日、ロンドン大学の考古学研究所では、Crowfoot-Kenyon のサムリア報告書が最も標準的な作品として考えられている。それと Reisner-Fisher の報告書とを研究するに、よつて、Wheeler-Kenyon の方法がよく理解されるのであるが、Reisner-Fisher の報告書を研究しおえた一学生は「途方もなへうんざりした」と語つた。その通りであつて、Kenyon

サムリア発掘調査史考 (一)

以後の目的意識のはつきりした報告書を読んだ後では、はじめは余りに複雑で閉口するが、入念に読めば理解出来るようになってくる。それ以前の報告書には、理解のために必要なことながらしばしば看過されているのである。

(14) シリアのタルソス (Tarsus) とアンティオキア (Antioch) の大きな発掘は Crowfoot-Kenyon のサムリア発掘と同時或はやや先に行われ、多くの重要な史料を発見した。しかし、土器の編年については多くの点で不備であつた。ペルシア時代以後の土器の層位学的編年が確立されはじめたのは、パレスティナ考古学の場合、一九五〇年代からである。P. W. Lapp, *Palestinian Ceramic Chronology*, 200 B. C.-A. D. 70, 1961, pp. 2f.

(15) 文献史料のない遺構については、Reisner は多くの誤りを犯した。例えば、初期ヘレニスティック時代の巨大な切石積円塔を、イスラエル時代のものとした如きである。Samaria-Sebaste, I, pp. 24~27. (約五〇〇年の誤差)

(16) R. S. Lamont et al., *Megiddo I*, 1939; G. Loud et al., *Megiddo II*, 1948, etc.

(17) G. E. Wright, pp. 117~123 in *The Bible and the Ancient Near East, Essays in Honor of W. F. Albright*, 1965.

(18) *Megiddo I* と *Megiddo II* & *IV*, 1000~780 B. C.; *II*, 780~650 B. C.; *III* & *IV*, 1000~780 B. C.; *I*, 600~350 B. C.

(四七一) 一三三

- Megiddo II の発掘報告 IV, 100~800 B. C.; III, 780~650 B. C.; II, 650~600.
- (61) W. F. Albright, The Excavation of Tell Beit Mirsim, vols. I, IA, II, III (Annual of the American Schools of Oriental Research, vols. XII, XIII, XVII, XXI-II, 1932~43).
- (62) J. W. Jack, Samaria in Ahab's Time, Harvard Excavations and their Results with Chapters on the Political and Religious Situation, Edinburgh, 1929.
- (21) Kenyon の考古学者としての足跡は南ローデシアのジンバブエ (Zimbabwe, 1929-)、トリポリタニアのサブラタ (Sabratha, 1948~49) にも及んでゐるが、Wheeler の考え方に従うならば、考古学は自然科学の一種であるから (op. cit., p. 16)、イギリス、アフリカ、アジアのいずれにおいても同じ方法で研究出来るのである。これは Wheeler 自身の考古学者としての活動範囲 (インド、イギリス) にもあらわれている。しかし、第三代目の研究者たちの間では、次第にこのような広範囲の活動をさせ、イギリス国内で基本的訓練を受けたのちは、研究テーマをかなりしぼる傾向があるように見える。
- (22) 一九六七年もイスラエル・アラブ戦争の後で続行されたが、いろいろな事情で中止されたらしい。
- (63) W. F. Albright, The Archaeology of Palestine, p. 39.
- (24) Stratum, Level, Period など層位を表わす言葉とは混乱があり、しばしば誤解を招く。P. W. Lapp, op. cit., p. 8 参照。
- (25) G. E. Wright, Israelite Samaria and Iron Age Chronology, BASOR 155 (1959), pp. 13~29; Wright, the Bible and the Ancient Near East, p. 120. 但し、両者のこの点についての論争は結論が出づらなうに思われる。上記の P. J. Parr 氏の講義は Kenyon の年代に従つて行われていた。又、同じ方法でなされたヘレニステイク以後の時代区分についても、Wright が鉄器時代について主張するやうな原則上の修正はされていない。但し、Kenyon の方法 (或はサムリアの遺構の性格) では、土器年代の上限を決定出来ない場合が多いと云ふ点が問題となつてゐる。P. W. Lapp, op. cit., p. 26.
- (26) 現在、アメリカとイギリスのパレスティナ考古学は Kenyon と Albright とを軸にして、いろいろな点で論争関係にある。例えば、中期青銅器時代の時代区分 (MBIIA か MBIか) や層位の表現 (Stratum か Level か) などであるが、根本は Wheeler 流の自然科学的色彩の強い考古学と広い意味の旧約聖書研究の枠を守らうとする Albright 流の考古学の差異である。
- (27) R. W. Hamilton, Guide to Samaria-Sebaste, Government of Palestine Department of Antiquities, Jerusalem.

lem, 1944; G. J. and M. K. Jahshan, Guide to the West Banks of Jordan, Jerusalem, 4th ed., 1966 (?), pp. 76~79.

(28) サマリアばかりでなく、ジェリコ、メギッド等の重要な出土物、死海文書などを収めた大博物館であるが、一九六七年六月のイスラエル・アラブ戦争の際、ヨルダン王国の手からイスラエル側の手にわたった。私が同年夏に訪れた時には、外壁に銃弾をあびたあとが生々しかったが、内容物は無事であつたらう。

(29) Reisner-Fisher の報告書では、Part I に一九〇八年の分、Part II-IV に一九〇九〜一〇年の分がのつてゐる。

(30) Samaria-Sebaste I, 3. The summit buildings and constructions, pp. 91~139; Samaria-Sebaste III, vii, A. Early bronze age pottery, pp. 91~94; B, I. Stratified groups (Israelite pottery), pp. 94~134; 3. The evidence of the Samaria pottery and its bearing on finds at other sites, pp. 198~209; ix, A. Stratified groups (Hellenistic pottery), pp. 217~235; B, 1. Terra sigillata, pp. 218~288; 2. Stratified groups (Roman and later wares), pp. 288~306; xv. Miscellaneous objects in metal, bone and stone, pp. 439~468.

(31) 私はコレー神殿の発掘結果を再検討した感想を、昭和四三年十一月三日の京都大学西洋史読書会大会において発表させて

らした。

(32) Samaria-Sebaste, III, pp. 198~208. 註 30 参照。

(33) P. W. Lapp, op. cit., pp. 25~41; pp. 123~126; etc.

(34) Ibid., pp. 56f.

(35) W. F. Albright, From the Stone Age to Christianity, Anchor Book, 1957, pp. 53f.

(36) Kenyon の権威はイギリスの西アジア考古学者の間では上述のように全く確立しているが、彼女が活躍の舞台として来たヨルダン王国では、遺跡の名前と“Kenyon” とが混同されているくらいで、現地人の学生の間でも殆んど神格化されている。